

平成26年度 活用力推進事業 授業づくり研究会

「意欲的に学ぶ生徒の育成～知識や技能を活用し、思考力を育てる授業づくり～」という研究主題のもと、国語科、英語科・美術科3本の授業を提案した。

「生徒が意欲的に発表したり、話し合ったりする姿に驚きました！」という感想を参加した先生方からたくさん聞くことができたことが何よりの成果である。国語科の公開授業、および各授業の分科会、全体会の記録を見ながら、この研究会を振り返ってみたい。

1 公開授業（3教科 国語・数学・英語）

校時	学年・組	教科	授業者
4校時	3年4組	国語	教頭 河辺 哲也
単元名	状況を読む	教材	「故郷」（魯迅・竹内 好訳）
1 ねらい	<p>(1) 生徒の意欲を高め、思考力を育てるために「平田中授業モデル」（次ページ参照）を踏まえた授業を構想する。</p> <p>(2) この単元を通して身に付けさせたい活用力とは、「語り手から離れて、語り手のものの見方を評価する力」である。</p> <p>(3) 言語活動の充実のために、以下のことに取り組む。</p> <p>①自分の感じ方や考えについて、その根拠を踏まえ表現させること</p> <p>②ねらいを深めていく発言については、教師が価値づけし、他の生徒につなげながら、一人の意見を全体に共有すること</p>		
2 授業の実際	<p>授業では、「故郷」の「離郷」場面を扱った。その場面には、ルントウが持って帰る灰の山の中に、「碗や皿」が埋まっているという出来事がある。</p> <p>ところが、語り手の「私」は、誰の仕業と考えているのか、明確には語らない。</p> <p>そこで、生徒に、「語り手『私』は、誰の仕業だと考えているのか」と問うた。その場面が、写真①である。</p> <p>授業では、挙手の多かった「ルントウが隠した」という立場で、再度、この場面を読み直してみた。その根拠として挙げた表現が写真②である。授業者としては、「誰の仕業か」という問いを通して、教材文を再度読み直すことがねらいであった。</p> <p style="text-align: right;">（詳細は指導案を参照）</p>		



<①：自分の考えを挙手で表現する>



<②：根拠としてあげた表現>

国語科学習指導案

平成26年11月20日(木) 4校時 平田中学校3年4組
指導者 教頭 河辺 哲也

1 単元のねらい 語り手の見方を読む

2 教材 「故郷」(魯迅 竹内好訳)

3 学習のとらえ方

(1) 生徒は、語り方から語り手自身の見方や考えを吟味する体験に乏しい。

「少年の日の思い出」(1年)や「盆土産」(2年)など、「私」や「僕」という一人称で語られる教材がある。これらの一人称の作品を読むとき、生徒は、「私」「僕」という語り手と同化して読んでいる。具体的に言えば、語り手の目を通した周囲の人物や情景描写を読みながら、人物の気持ちやその場の雰囲気を感じ取っているのである。

しかし、作品世界にどっぷりと浸れば浸るほど、語り手と同化し、語り手自身のものの見方や考えに気づかないことが多い。語り手の見方に触れようとすれば、語り手から離れ、表現の背後に流れる語り手自身の見方や考えを吟味する体験が必要となる。

(2) 語り方を根拠にしながら「私」の見方を読み取ることができる教材である。

本単元で扱う「故郷」は、別れて20年になる故郷について、「私」が語る作品である。特に、「美しい故郷」の象徴であるルントウの変容ぶりを語る場面が、この作品の中心をなしている。例えば、回想場面では「ルントウの心は神秘の宝庫」という見方から、再会後は「くのぼうのような人間」という見方へ変わる。さらに、再会後のルントウに対する見方を決定的にしたものが、母の話を聞いた後の「私」の態度である。「それ(灰の山の中の碗や皿)はルントウが埋めておいたにちがいない」という話を聞いたとき、「私」はその話を否定しない。その後の「今では急にぼんやりしてしまった。」という語り方は、ルントウの仕業であることを「私」は暗に認めたことを表している。このように、表現を根拠にしながら、語り手である「私」の見方を読み取ることができる教材である。

(3) 語り方の背後にある「私」の見方を読み取るおもしろさを味わわせたい。

一人称の文学作品を読むとき、語り手に同化し、語り手と周囲の人物との相互関係や心情をとらえることは重要である。しかし、義務教育を終える3年生では、語り手から離れ、語り手の背後にあるものの見方に気づかせたい。それは語り手を「批評」する力にもつながっていく。本時は、現在のルントウに対する「私」の見方を読む授業である。その具体的な場面として「母の話」を取り上げ、「母の話を聞いて『私』は誰の仕業だと考えたのか」と問うてみたい。その際、考えを深める手立てとして、以下の2つの立場をあげる。

①ルントウである。

②ルントウではない。

①②のどちらかを選ばせ、その根拠を「旅立ち」や「再会」場面の語り方の中に見つけさせる。このような手立てをとおして、「私」の見方を読むおもしろさを味わわせたい。

4 指導計画(全6時間)

- (1)「故郷」を読み、感想をもつ。(1時間)
- (2)4つの場面と主な登場人物を指摘しながら、あらすじをつかむ。(1時間)
- (3)回想場面と再会場面のルントウを比較しながら、変容を読み取る。(2時間)
- (4)母の話(灰の山)を聞いたときの「私」の考えを読み取る。(1時間 本時)

5 本時の学習指導

「灰の山に埋めたのはルントウにちがいない」と考えている「私」の見方を、表現を根拠にしながらか説明することができる。

	学習活動 学習内容	生徒の反応	教師の支援
ね ら い 10 分	1 本時は、母の話を「私」はどのように受け止めたのか、考えていくことを告げる。 ・「わら灰もみんなほしい」という表現	・あまり気に留めていない表現なので、問いに対して戸惑う生徒が多いだろう。	① 灰の山に碗や皿を埋めたのは誰だと「私」は考えているのか問いかけ、この出来事に対する関心を高める。
考 え よ う と す る 20 分	2 「私」の見方について、以下の2つの立場で考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;">ア ルントウではない(否定) イ ルントウである。(肯定)</div>	・自分の考えではなく、「私」の立場で考えることに戸惑う生徒がいるだろう。 ・アとイで悩む生徒がいるかもしれない。	② 上の問いを踏まえて、旅立ちの場面を音読する。 ・母の話を、「私」はどのように受け止めたか、2つの立場で考えさせる。 ・選んだ立場の根拠を、旅立ちの場面や再会場面から見つけ、線を引かせる。 ・周囲と情報交換させる。
表 現 す る 15 分	3 「私」の見方について発表する。 ・「私」の見方 ア 名残惜しい気はしない イ 急にぼんやりしてしまった ウ でくのぼうみたいな人間 等	・選んだ根拠を見つけることが難しい生徒がいるかもしれない。 ・ルントウが隠したことを否定しない「私」に気づく生徒がいるだろう。	③ 選んだ立場を明確にして、理由とともに発表させる。 ・アとイで対立した場合は、それぞれの意見を聞き、議論させる。以下の表現に着目させる。 ・「今では急にぼんやりしてしまった。」等
振 返 る 5分	4 今日の振り返りをする。 ・「わたし」のルントウに対する見方 ・次時の課題	・気づいたことや疑問点を書くだろう。 ・結末の「希望」という言葉について、次時は考えることを告げる。	④ 時間があれば、「これもたまらなく悲しい」という表現について考えさせる。

1 主眼

ルントウに対する「私」の見方を、表現を根拠にしながら説明することができるとができる。

2 指導上の留意点

- (1) ルントウが欲しがった品物の中に、「わら灰」があったことを確かめる。
- (2) 以下のことを確認する。
 - ・ 皿を掘り出したのは誰か。
 - ・ 「ルントウが埋めたに違いない」と結論づけたのは誰か。
- (3) 3の問いを投げかけ、語り手「私」は、「肯定」「否定」のどちらの立場か、挙手させる。
- (4) 自分の考えの根拠となる表現を見つけ、線を引く。また、線を引いた理由を考えさせる。
- (5) 発表と振り返り
 - 「銀の首輪の小英雄の面影」にかかわる発表については、価値づけし、発言をつなげ、深める。また、ねらいに対する考えをノートに書かせる。

評価

ルントウに対する「私」の見方を、表現を根拠にしながら説明することができたか。

〈根拠となる表現〉

- ・ 銀の首輪の小英雄の面影
鮮明↓急にぼんやり
- ・ これもたまらなく悲しい
- ・ 名残惜しい気はしない

＝ 失望

- ルントウである。(肯定)
- ルントウではない。(否定)

「私」の考え

「それはルントウが埋めておいたちがいない」

ヤンおぼと母の結論

灰の山から碗や皿を十個あまり掘り出した。(ヤンおぼさん)

ねらい

語り手「私」は、「誰が」隠したと考えているのか

わら杯もみんな欲しい＝灰の山
灰の山＝母の話

◎ねらい

ルントウに対する「私」の見方を、表現を根拠にしながら説明することができる。

●本時の流れ

1 本時の確認

「わら灰」と「灰の山」のつながりを確認する。

2 音読

- ① ねらいを視写する。
- ② 該当する場面を各自音読する。

3 問い

「語り手の『私』は、誰が隠したと考えているのか。」

4 根拠と自分の考え

- ① 自分の考えを挙手で表現
- ② 範読
- ③ 根拠となる表現に線を引く。

5 意見交換と発表

- 自分の考えと根拠を周囲と比較しながら、話し合う。
- 自分の考えとその根拠を発表する。

6 振り返り

○友達の見方を踏まえたらうえて、今日のねらいに対する自分の考えをノートに書く。

2 授業者による考察（国語科：教頭 河辺哲也）

（1） 授業の意図

「私」「僕」という一人称で語られる教材（例えば、「少年の日の思い出」など）がある。これらの一人称の作品を読むとき、生徒は語り手と同化して読んでいる。

しかし、作品世界に浸れば浸るほど、語り手自身のものの見方や考えに気づかないことが多い。

一方、学習指導要領第3学年の「読む」の目標は、以下のとおりである。

目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身に付ける

「表現の仕方などを評価」とは、「故郷」においては「語り手の語り方」に着目し、自分の考えをもつことととらえた。そこで、以下のような問いを発し、「灰の山」の出来事に対する「私」の語り方を読ませたいと考えた。

「私」は誰の仕業だと考えているのだろうか。

（2） 生徒の反応

① 「語り手がどのように考えているのか」ということを授業で取り組むのは、初めての経験だった。「私」は「ルントウが隠した」と考えている表現が文から読めることがわかった。

② Yさんが「名残惜しい気はしない」のところに線を引いたという意見は、納得できる。僕だったら、親友と30年後に会って、僕のを盗むような話があっても、信じたくない。

③ 一番印象に残る発言は、S君だ。理由は、一番大切な友達の姿が「急にぼんやりしてしまった」というように変わってしまったことが「私」のルントウに対する気持ちがわかるからです。

（3） 成果（○）と課題（●）

○ 新しい読みの視点を得たこと

上の（2）の生徒の感想のとおり、「私」という語り手から離れ、「私」の語り手に着目した発言を引き出すことが出来た。「急にぼんやり」「名残惜しい気はしない」等の表現を根拠に、「私」の見方に迫れたことは、新しい読みの視点を得た結果だと思ふ。

● 生徒の「自然な読み」を保証できなかったこと

授業の最後まで「ルントウではないと思う」と、1時間中考えていた生徒がいた。「読み手の私」から離れられなかったのである。授業の中で、「ルントウの仕業」という立場から考える必然性がなかったためであろう。

改善点として、「読者の私」と「語り手の私」を区別させる場面を設定することが必要である。次時は以下のように問うてみたい。

- (1) あなたは誰の仕業だと思うか。(読者としての「私」)
 (2) 語り手の「私」は誰の仕業と考えているか。(語り手の「私」)

(4) 指導助言 (岩国市立美川中学校 中村 浩 校長先生から)

- ① **教材の言葉だけでなく、生徒の発する言葉も教材であること**
 その言葉を引き出す授業技術を、今日の授業を通して共有したい。
- ② **教師のねらいと生徒の活動が「ずれる」ことの重要性**
 「教師は表現に着目させたい」「生徒は誰の仕業なのか考える」というズレが大切である。
- ③ **活用力を育てる授業について**
 現在の「活用力育成の授業」を知ることと今後の方向性を、私たちは考えたい。

全 体 会

実
施
内
容

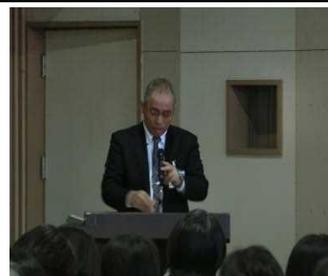
実施内容
及び気づき



<全体発表>



<分科会報告>



<指導助言>

全体発表では、生徒の意欲を高め学力を定着させる授業をめざし「平田中授業モデル」を踏まえた2年間の取組を述べた。分科会では、「平田中モデルは学習内容定着のためにとっても効果的だ」という声を多くいただいた。

最後に、山口県教育庁義務教育課主査 瀨崎美幸様に「継続的な取組が成果を生み出すこと」というテーマで総括していただいた。